

令和7年度 大明小学校の教育について(教職員自己評価)の結果とまとめ

調査対象人数:教職員 27人

調査実施時期:令和7年 12月 15日(月)~12月 23日(火)

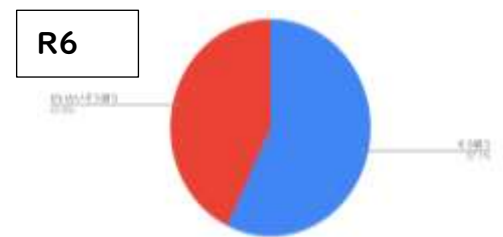
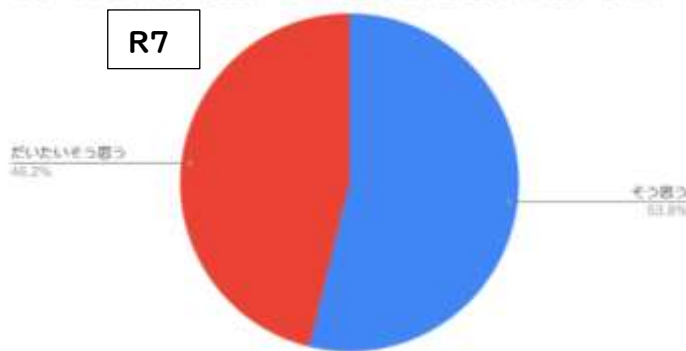
昨年度、評価項目の見直しを行い、2年目の評価となる。左側の円グラフが今年度の評価結果となり、右側の小さい円グラフが昨年度の評価結果となっている。

学校経営目標

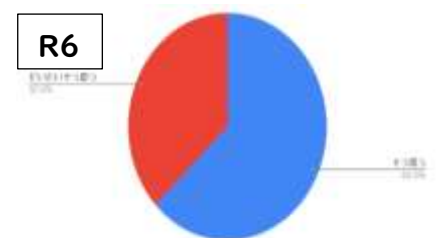
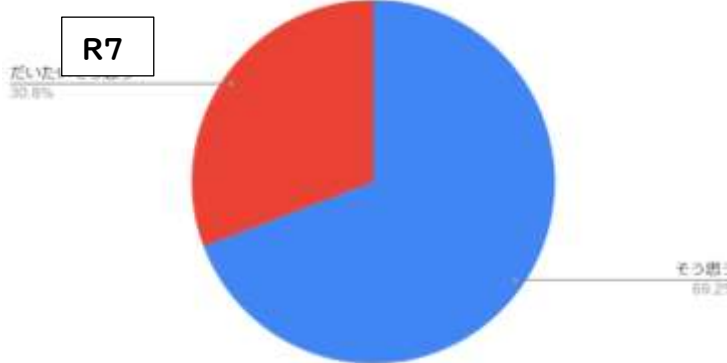
1. 学校教育目標や具体的行動目標は、適切に設定されている。

「自ら考え 活動する 心豊かな子ども」

～あいさつができる きまりが守れる 進んで学習できる 思いやりがもてる～



2. 学年学級の教育活動は、学校教育目標を踏まえたものになっている。



3. 学校教育目標や経営方針が児童や保護者に理解されるよう配慮されている。



【考察・改善点】

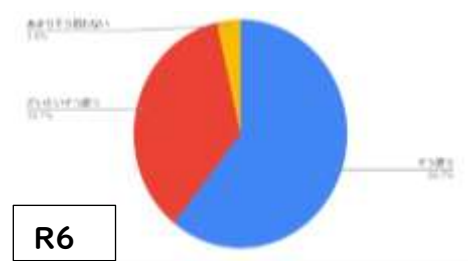
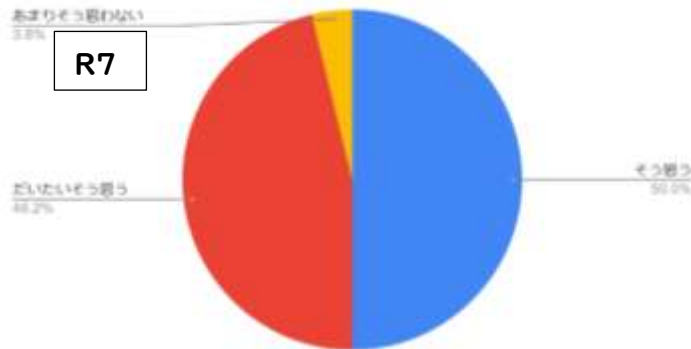
教職員全員が学校の教育目標を深く理解し、共通認識のもと日々の教育活動に取り組んでいる。組織全体として「目指すべき姿」が共有されており、高い意識で実践に取り組んでいると評価できる。

現在の目標と実践が一致した良好な状況を持続させるため、目標に即した好事例を共有する時間を設ける。互いの実践を議論したり、振り返ったりしあうことで、教職員の意欲や実践力の向上を図る。

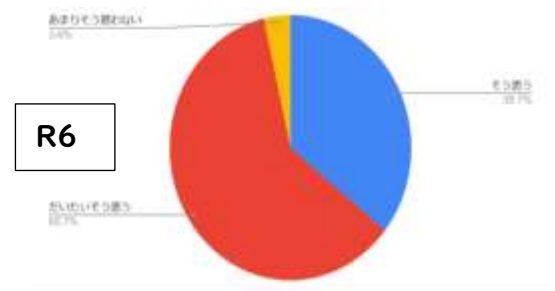
教育活動を保護者や地域へ伝える際、教育目標との関連性を明示する等の工夫を行う。ホームページや各種通信において活動の意図を可視化し、学校の目指す姿への理解促進に努める。

学校組織・学校安全

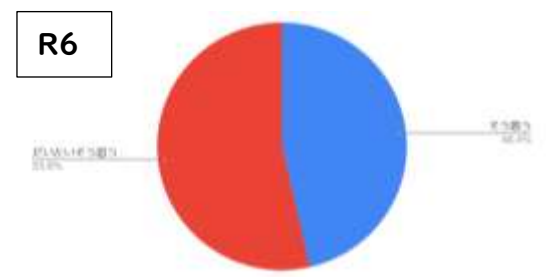
4. 学校運営に関する報告・連絡・調整はスムーズにできている。



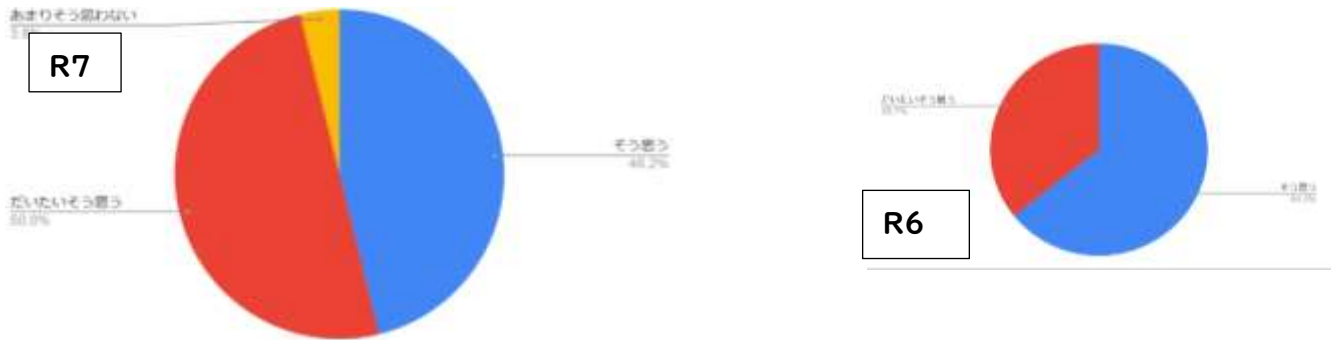
5. 会議や打ち合わせは学校運営に適切に機能している。



6. 教育課程に本校の特色が生かされている。



7. 研究主題は、学校課題に合った適切なものである。



8. 校舎内外の施設設備について定期的に点検し、結果を適切に処理している。



出された意見

- ・職員同士が互いを高め合える環境にあると感じる。
- ・管理職の先生方に支えていただき、安心して職務に励むことができています。職員のメンバーにも恵まれ、毎日生き生きと働くことができています。自分自身が気持ちよく働いていることで、児童にも少なからず良い影響が出ているのではないかと思います。
- ・これからもお互いの考えを尊重しながら、思いを伝えあえる職場であると良いと思います。
- ・研究主題は、県の指定研究ということで決定されたものだったが、マット運動を研究して勉強になった。授業はしていないが、系統的な指導・目標の設定やそれに向けて同指導していくか、考えて指導していくことの大切さを改めて実感した。
- ・学校行事に関する細かい連絡も、全員に周知していないことがたくさんあった。
- ・掃除や廊下の歩き方、移動の仕方などの程度、静かに歩き、やればいいのかかわからないことがありました。
- ・市単の先生方に主任会議などの内容が伝わっていない時があります。どなたが知らせるのでしょうか。

【考察・改善点】

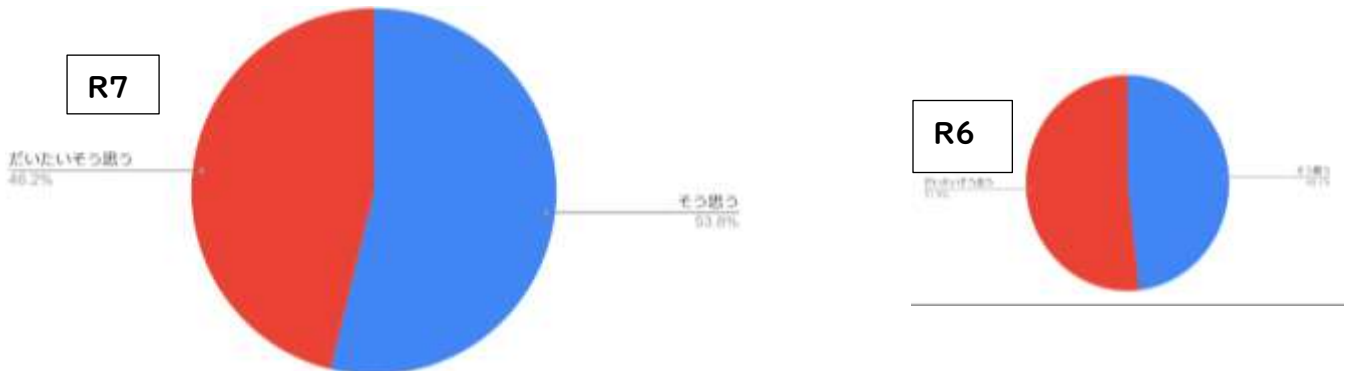
職員間の信頼関係や人間関係は良好である一方、設問4・5および自由記述から会議のあり方や連絡調整機能には改善の余地があると思う。多様な勤務形態の職員が在籍している現状を踏まえ、情報共有ルールの見直しと徹底を図り、連絡漏れのないシステムを構築する。重要事項については全教職員の理解の確認と、風通しの良い組織運営を継続・発展させていく。

研究指定校としての活動を通じ、学校と児童の実態に即した研究主題のもと、組織的な授業づくりが定着している。今後もこの成果を継承し、全教職員の共通理解に基づく指導体制を維持する。また、保護者評価から課題とされる「家庭学習」の充実についても、重点的な取り組み課題として位置付ける。

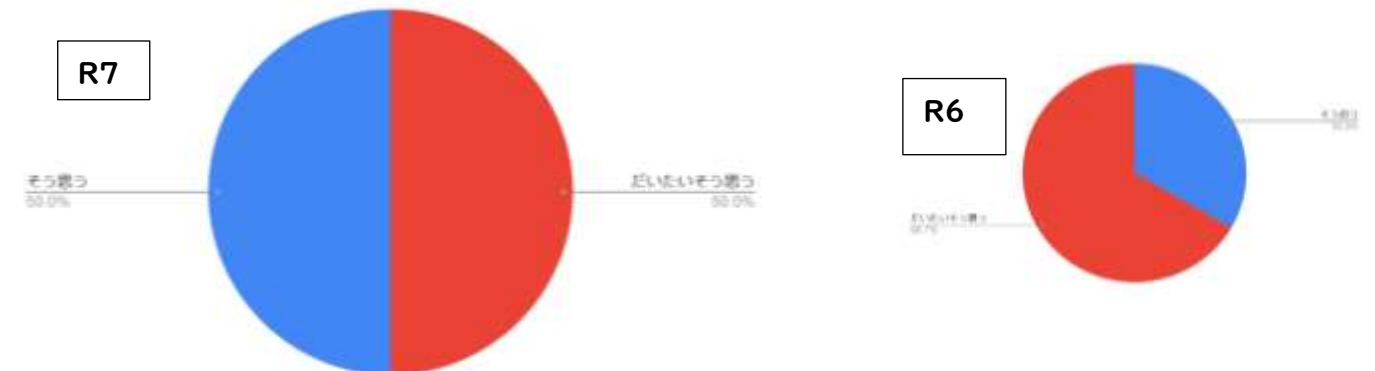
施設の老朽化は見られるものの、日々の点検活動等により安全管理に対する職員の意識は高く維持されていると思われる。今後も児童の安全確保を最優先とし、市教育委員会と連携して計画的な修繕・整備を推進していく。

学習・生徒指導

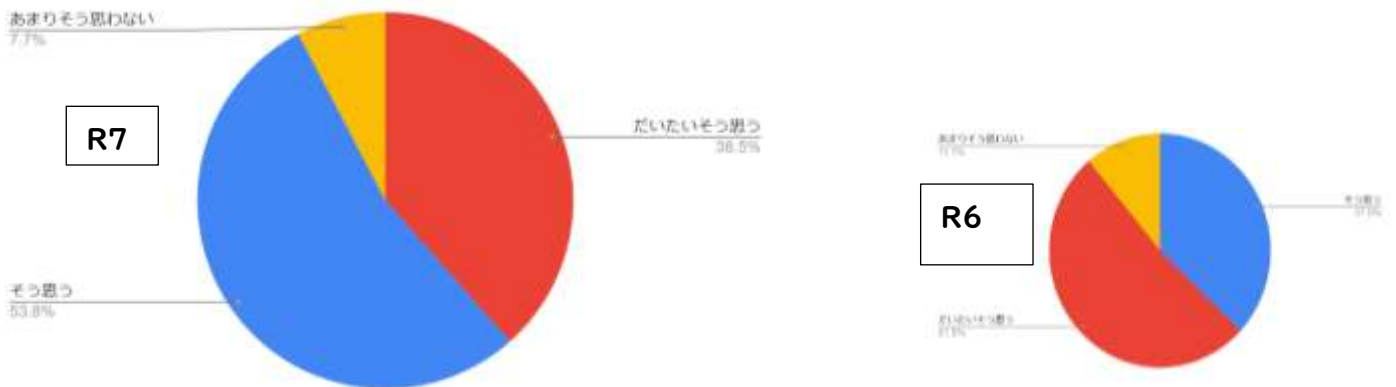
9. 教材研究・事前の準備等を行い、分かる・楽しい授業づくりに努めている。



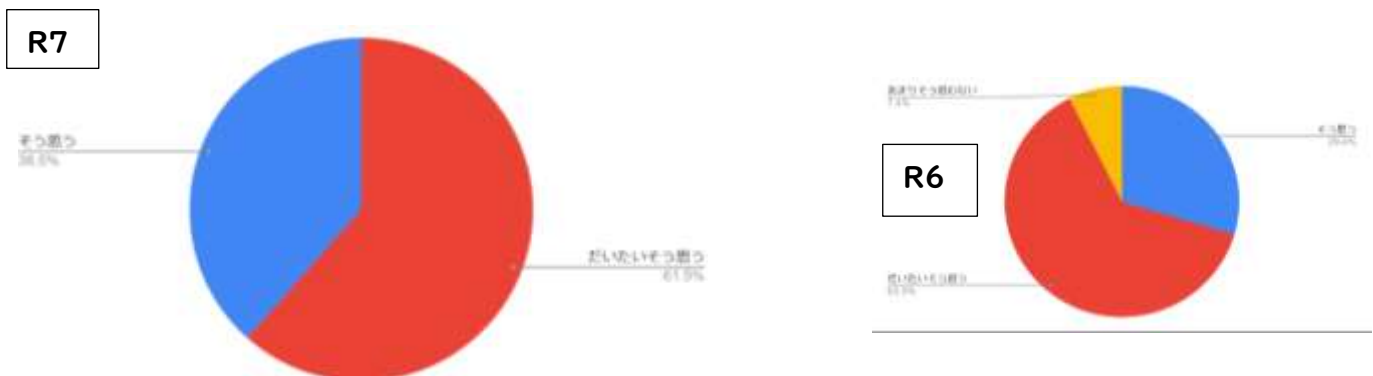
10. 創意工夫のある授業実践を通して、自ら学ぶ意欲と態度を育てることができている。



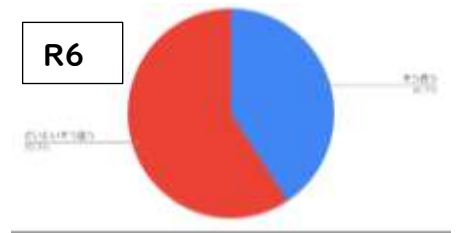
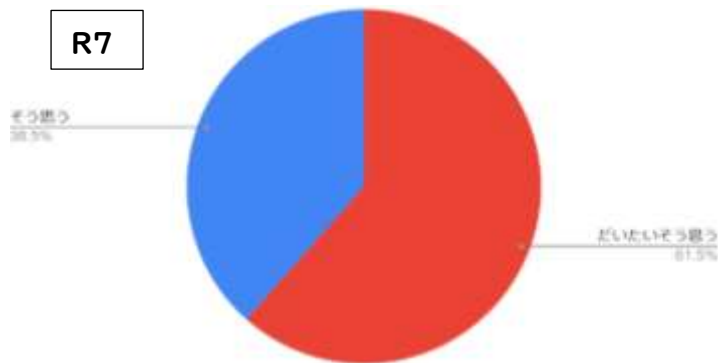
11. 授業でICT機器やタブレット端末を有効活用し、深い学びにつながるような工夫をしている。



12. 道徳の時間を要として、道徳的実践力・道徳性などが高められている。



13. 学級活動や児童会活動は、自主的・自発的に運営されている。



出された意見

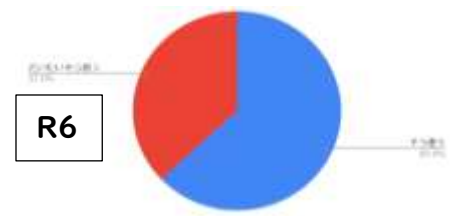
- ・タブレットを使うことで深い学びに繋がっているか自身がない。依存症ではないかと思える児童にどうすればよいか。効果的な使用になるのか。
- ・自分たちで考えながらルールや決まりを作り守ってくのはとても良いと感じます。

【考察・改善点】

基礎的な授業力向上と児童の主体性育成については、教職員全体が成果を実感しており、教育活動は安定していると思う。一方、ICT 活用に関しては、教職員間の習熟度の二極化や、「深い学び」への接続に対する不安が課題となった。機器活用の日常化は達成されつつあるが、今後は「効果的な活用」および「デジタルウェルビーイング」への対応が求められる。教職員研修を継続・充実させ、分かりやすい授業づくりと並行して、授業・家庭学習双方における質の高い ICT 活用を推進する。

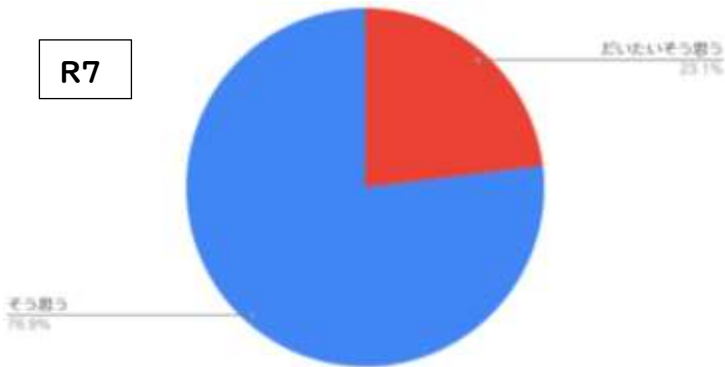
児童が自ら考えルールを形成・遵守する活動は好評価が示されている。今後も「特別の教科 道徳」の充実を図ることはもとより、授業での学びと日常生活との実践をつなぐ指導を意識し、児童の道徳的実践力の育成に努める。

14. 学校行事は、学校生活に活力を与えるよう計画運営されている。

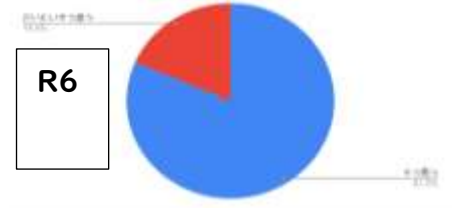


15. いじめのない(許さない)誰もが楽しい学級・学校づくりに努めている。

R7

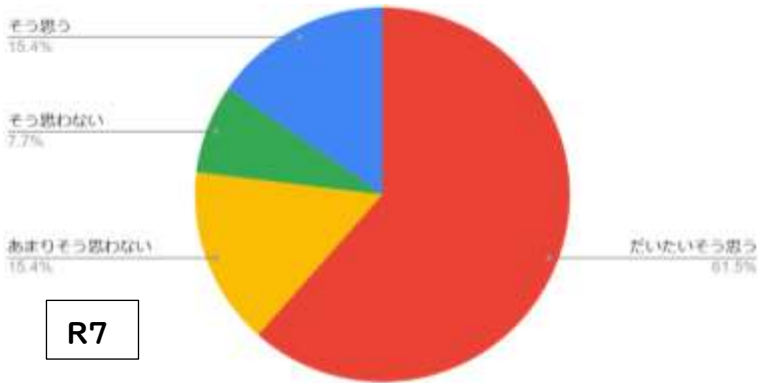


R6

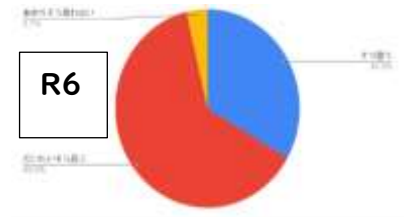


16. 読書に親しみ、読書意欲を高めるような指導に努めている。

R7

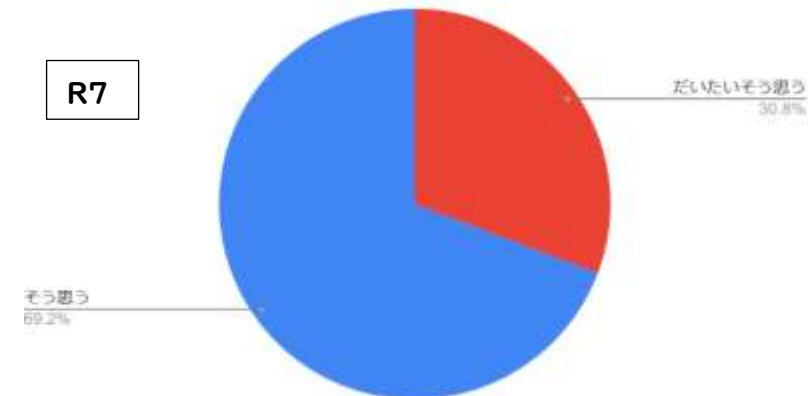


R6



17. 自分の命を守る行動がとれる児童の育成に努めている。

R7

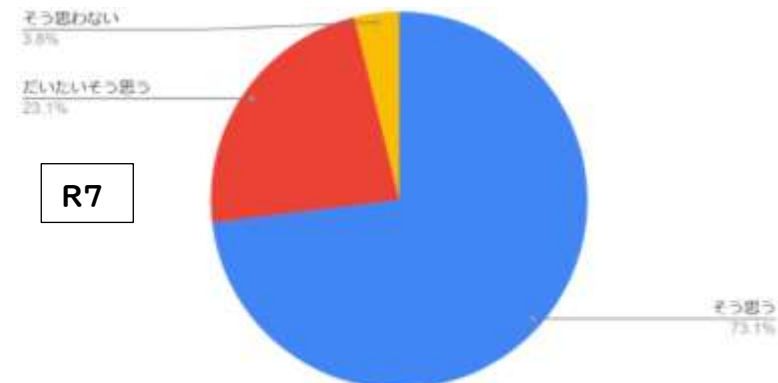


R6



18. 職員が共通理解をもち生徒指導を推進している。

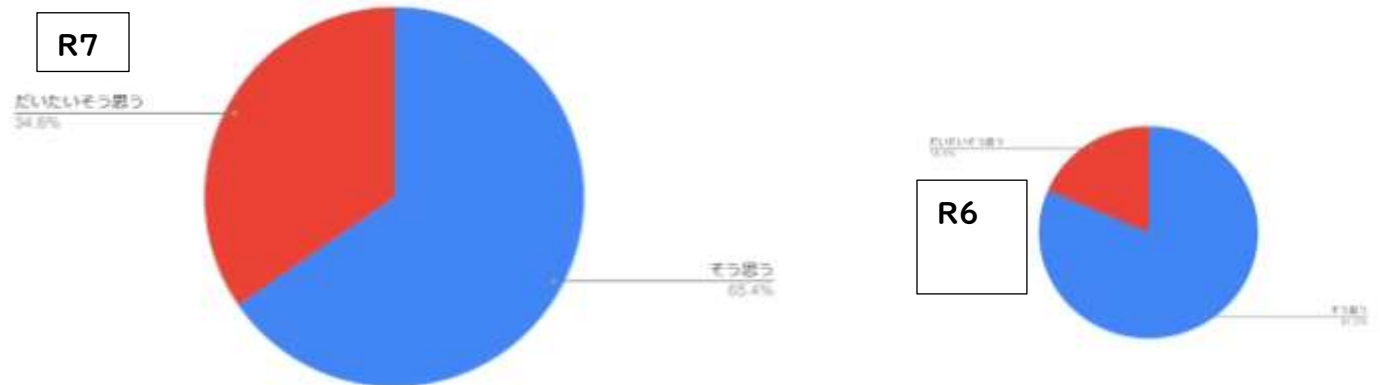
R7



R6



19. 支援委員会を中心とした支援が適切に行われている。



出された意見

・大明小に来てから驚くほど成長したと喜んでいる転入生の保護者がいる。支援学級の児童を交流学級の担任をはじめみんなで理解し、対話をしているからこそその成果だと思う。

・読書活動については、自身でも児童に指導をあまりできなかった。

また読書週間など今後うまく活用できるようにしていきたいと思い「あまりそう思わない」を選択しました。

そうじや給食の約束をはじめとする学校のきまりの指導が学級によって差があり徹底していない。4月に全教職員で確認し、指導の方向性を決めたとすなわ、少しの「まあいや」の繰り返しにならないように全員で取り組んでいきたいと思う。

【考察・改善点】

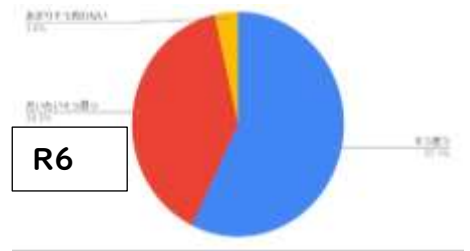
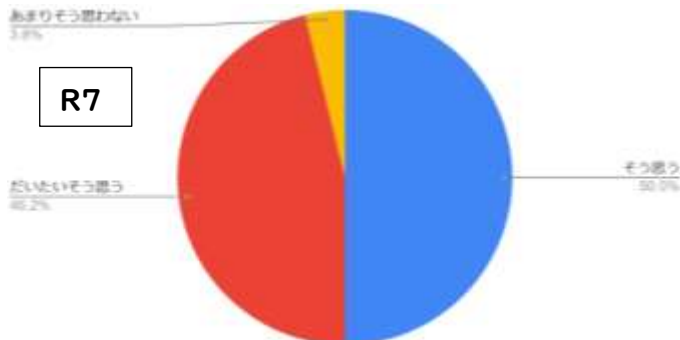
教職員の共通理解に基づく生徒指導体制が確立されており、支援委員会もしっかり機能し、高いレベルで運用されていると思う。特に特別支援コーディネーターを中心とした全校支援体制は本校の特色であり、大きな成果を上げている。今後もこの体制を維持・継承し、道徳的実践力の育成と合わせ、児童が安心して過ごせる環境を保障していく。

いじめ防止に関しては教職員の意識が高く、組織的な対応ができている。今後も児童への丁寧な見取りと傾聴に加え、保護者への情報発信（可視化）を強化していきたい。一方、基本的な生活習慣やルールについては、概ね良好としつつも「徹底されていない」との指摘がある。微細な綻びが全体の規律低下を招かぬよう、危機感を持って指導にあたる。

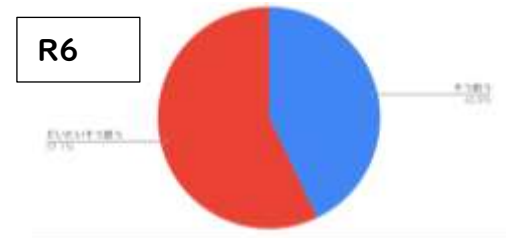
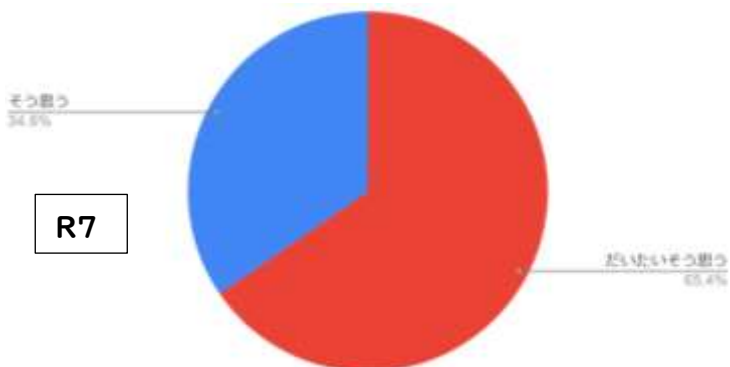
読書活動の推進は本校の課題である。「指導時間が不足していた」との分析を踏まえ、短時間からの読書タイム確保など、スモールステップによる指導体制を再構築し、改善に努める。

家庭・地域との連携

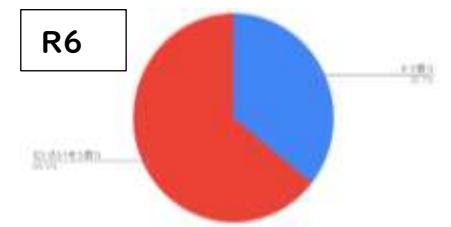
20. 授業参観・懇談会は適切である。(回数・内容・出席率)



21. PTA活動は目標達成のために展開されている。



22. 地域の人材や学校応援団を積極的に活用している。



【考察・改善点】

保護者からは、「普段の授業や児童の生活の様子を参観でき、有意義であった」との肯定的評価を得ている。今後も保護者の学校教育への理解を深めるため、計画的な学校公開日の設定・充実に努める。

今年度も地域人材を積極的に活用し、特色ある教育活動を展開した。

第1学年：地域の方々の協力のもと、昨年度に引き続きサツマイモの栽培活動

第2学年：市生涯学習課より講師を招聘し、地域の歴史や文化の学習

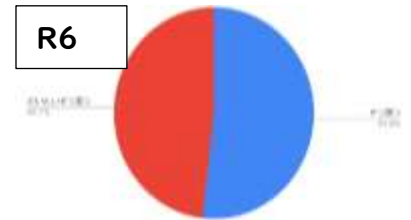
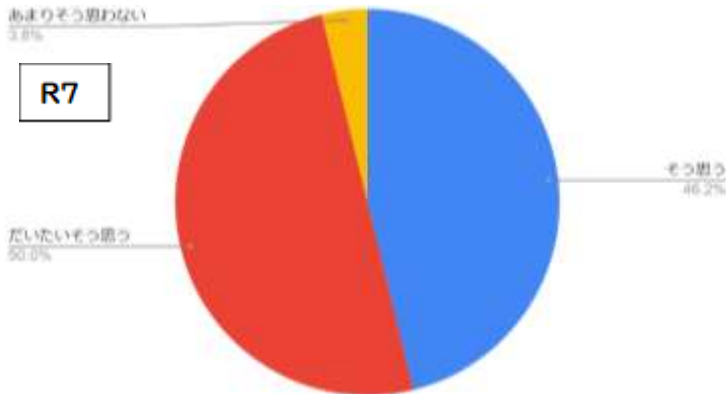
第4学年：地域保存会の指導による「大明小ばやし」の体験や伝統工芸に関する学習。

全学年：「地域ふれあい道徳」地域人材等をゲストティーチャーとして招いた授業

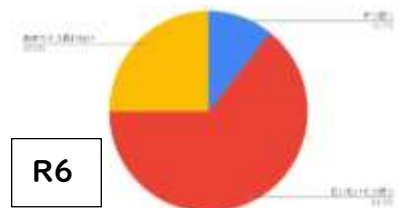
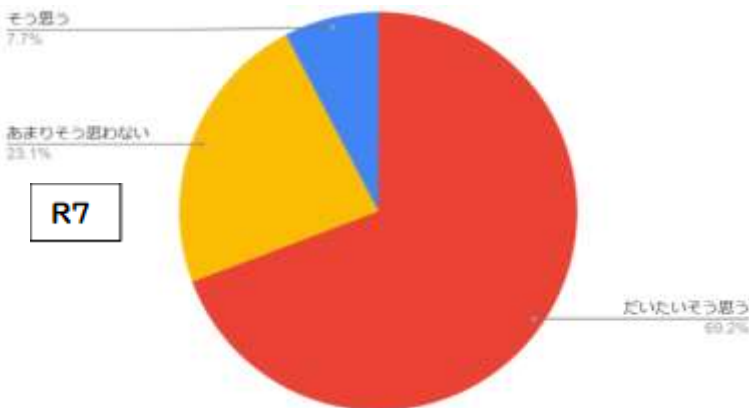
今後は、地域にどのような人材・教材（教育資源）があるかを再確認するとともに、それらを教育課程にどう効果的に位置付けるかについて教職員間で協議を重ね、さらなる積極的な活用を図

児童の姿

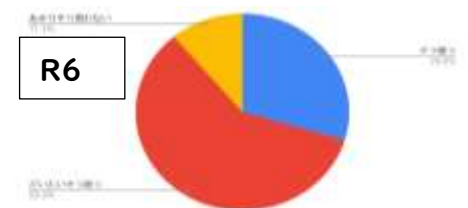
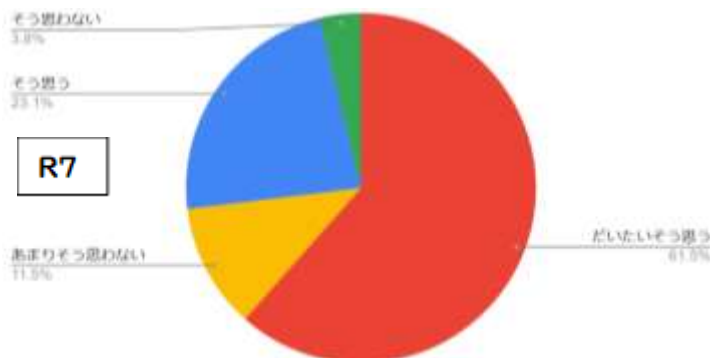
23. 児童は、学校が楽しいと感じている。



24. 児童は、明るいあいさつができています。



25. 児童は、清掃活動にまじめに取り組んでいる。



出された意見

- ・あいさつ運動を取り入れて活動してきたが、期間中はできても取り組みでないときはなかなか継続しない。あいさつの意義を改めて伝えていく必要がある。無言掃除も意識して取り組む児童がいる一方で話してしまう児童がいる。環境の乱れは心の乱れに繋がるため、児童会活動を通してもっと全校で積極的に取り組む必要がある。
- ・清掃活動について、少しずつですが、集中清掃や汚いところを見つけて取り組む姿勢が身につけているように感じます。

【考察・改善点】

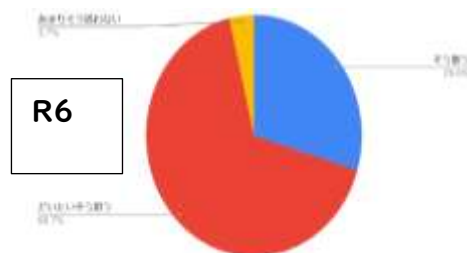
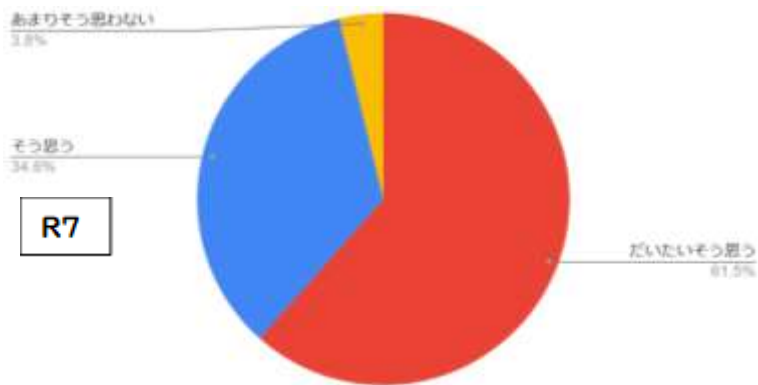
教職員の多くは、児童が「学校は楽しい」と感じていると認識しているが、アンケート結果を見ると、児童や保護者の認識とは若干の乖離が見られる。どの学年にも「学校が楽しくない」と感じている児童が少数ながら存在することを重く受け止める必要がある。今後は、これまで以上に丁寧な観察と傾聴を行い、児童の小さな変化を見逃さないよう努めるとともに、家庭と綿密に連携し、個々の心情に寄り添った支援を行っていく。

あいさつの定着度についても、教職員・保護者・児童の間で意識の差が見られた。「強調週間などの期間中はできるが継続しない」「言われればするが自主的ではない」という指摘から、あいさつが習慣化されておらず、形骸化している現状が推測される。一過性のものではなく、日常的な「あいさつ文化」の醸成が必要である。児童の良さや努力は認めつつ、目指すべき「明るいあいさつ」について児童と共通認識を持ち、内発的な意欲を引き出す指導に転換していきたい。

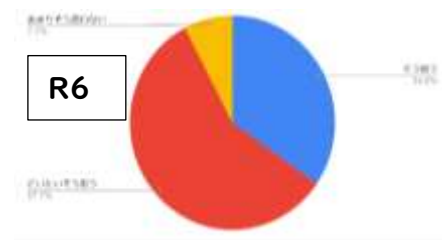
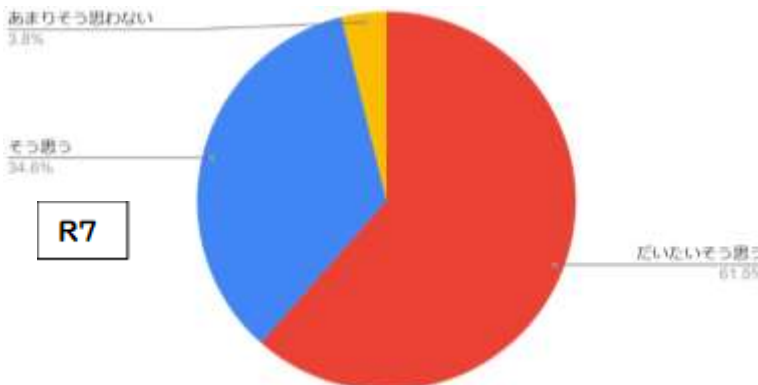
清掃活動において自由記述で「汚れた場所を見つけて取り組む姿勢」への高い評価がある一方、否定的な回答も存在しており、取り組みの二極化が懸念される。「環境の乱れは心の乱れ」との指摘通り、規律の緩みは見逃せない課題である。今後は、「やった」という形式ではなく、「無言で集中できたか」等、活動の「質」に焦点を当て、具体的な称賛を行う。併せて、児童会活動と連携して取り組み、環境美化に対する当事者意識を高めていく。

小中一貫教育

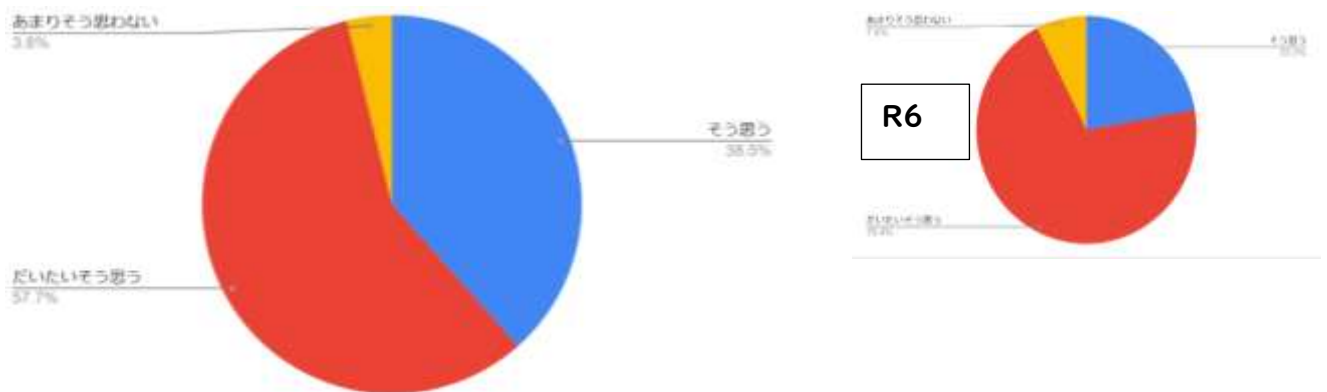
26. 小中連携の目指す児童・生徒像（ふるさと、人、学びを大切にする甲西の子）を意識して教育活動の推進に努めている。



27. 義務教育9年間を見通した教育課程を編成し、実践つなげている。



28. 小中で連携した研究の推進や交流活動を展開することにより、中1ギャップの解消につなげている。



出された意見

小中連携で、2 学期授業を見あう機会を設けてあったが、各自で行きたい時間を選ぶということもなかなか難しく、実践できなかった。行ける日も少ないと感じた。公開や校内研究などと合わせて、行く日を設定した方が行きやすいかと感じました。

【考察・改善点】

小中連携に関する全項目で肯定的な評価が得られており、多くの教職員が「甲西の子」の育成を目指し、義務教育 9 年間を見通した教育活動の必要性を認識している。一方で、「そう思う (A 評価)」が 4 割程度にとどまり、「だいたいそう思う (B 評価)」が過半数を占めた。これは、連携の意義は理解しているものの、「具体的な連携活動への参加」や「実感の伴う実践」においては、依然として改善の余地があると教職員自身が感じているためと推測される。

自校のみでの改善には限界もあるが、昨年度より取り組んでいる 5 年生の林間学校や 6 年生のポッチャ交流会、中学生とのあいさつ運動、陸上記録会などの活動を形骸化させないことが重要である。今後は、活動内容の質的向上を図るとともに、教職員間の意見交流をさらに活性化させていく。また、小中の相互授業参観も、「中 1 ギャップ」の解消や授業の質的向上、9 年間の連続性ある指導のために極めて有効であり、積極的に推進すべき課題である。

これらの取り組みや小中連携の意義について、保護者や地域の方々へ周知・広報していく活動は最も重要かつ不可欠な要素であり、今後さらに力を入れていく。